ラフカディオ・ハーンのゴーチェ作品「クラリモンド」の受容をめぐって

梅　本　順　子

Lafcadio Hearn's Reception of "Clarimonde" by Théophile Gautier

Junko UMEMOTO

Abstract: Théophile Gautier was one of Lafcadio Hearn's favorite French writers, and greatly influenced Hearn's own writing from the newspaper articles he published in New Orleans to the later Japanese stories he retold. In particular, he was fascinated by Gautier's short story "La Morte Amoureuse." Hearn translated it himself into English with the title of "Clarimonde," the name of Gautier's female vampire protagonist. He adored Romuald, the priest in Gautier's tale who falls in love with Clarimonde, and was taken by the story's theme of a love stronger than death. In some of his own stories, notably "The Fountain of Gold," "The Dead Love," "A Passional Karma," and "The Story of Ito Norisuke," Hearn created similar protagonists fatefully bound to ghostly lovers. In this article, I discuss a number of such protagonists who Hearn portrays as never afraid of ghostly lovers and who were willing to sacrifice themselves for love.

1. はじめに

ラフカディオ・ハーン（Lafcadio Hearn, 1850-1904）は、渡米してオハイオ州のシンシナティで記者生活を始めて以来、次に移り住んだルイジアナ州ニューオーリンズでも新聞記者としての活動を続けた。金銭的にも時間的にも自分が本当にしたいことができるような余裕が出るにつけ、その記事内容は、社会や犯罪に関するものだけでなく、多岐にわたるものとなっていた。中でも、文学関係の記事の比重が増したことが、この時代の大きな特徴である。

ニューオーリンズは、他のアメリカの都市とは異なり、19世紀初頭まではフランス領であった。ハーンが滞在したころは、住人の多くがフランス系のクレオールと呼ばれる人々のため、フランス語の新聞や雑誌が通常発行されており、フランス文化の名残がここかしこで感じられる街であった。少年期に受けた教育からフランス語に堪能であったハーンは、フランス文学を英訳し、発信することにいそしんだのである。ハーン研究家のベンチェン・ユー（Beongcheon Yu）は、1882年をもってハーンの芸術を研究する起点とするにふさわしい[1]というが、この年こそ、テオフィル・ゴーチェ（Théophile Gautier, 1811-72）の『クレオパトラの一夜、ならびに幻想作品集』（*One of Cleopatra's Nights and Other Fantastic Romances*, 1882　この後は『クレオパトラの一夜』と呼ぶ）という6編からなる短編集を英訳出版した年であった。

では、なぜ、この作品集の出版がハーンにとって一大転機と考えられるのか。この点について少し補足したい。のちのハーン文学を支える文体、ならびに美意識の形成という点で、この英訳が果たした意義は大きい。いわばハーンの文学活動を左右することになったからである。ハーンが文体

について異常なまでのこだわりを持っていたことは多くの研究者が指摘するところだが、先に触れたユーは、そのようなハーンが文体の模範としたのがゴーチェだとする。特に、『クレオパトラの一夜』の「読者へ」と題する序文でハーンが述べたゴーチェに対する評価に着目した。「ゴーチェは作家にして画家であり続けた。彼の作品のそれぞれのページは絵画であり、各センテンスは色彩の筆致そのものだ。彼はまさに19世紀のほかのいかなる作家もなさなかった「ことばで色を塗る」ことを知っていた作家である」(2)というハーンのゴーチェ批評のくだりを取り上げたユーは、ゴーチェを模範とした証拠だとする。また、ハーンは言葉の音楽家ではなく、画家でありつづけたともいっている。(3)

さらに美意識の点でも、ゴーチェの作り出す幻想空間にハーンは傾倒した。詳細については次の項に回すが、ハーンにとってこの時代の翻訳出版は、独自の文学作品を生み出すための一種の実験であったといえるだろう。また将来の創作のためにはどうしても通過しなければならない一つの段階であった。特に日本での文学活動において、翻案作品の制作にその帰着点を見出したハーンにとって、翻訳とは何かをまずきちんと定義する必要があったといえよう。

実際、『クレオパトラの一夜』の序文のみならず、1882年から83年にかけての友人や知人に宛てたハーン書簡には、フランス文学の翻訳に関する話題に事欠かない。とりわけ、ハーンの仕上げたゴーチェの英訳作品の読者と交わした書簡において、その翻訳を励ますものがある一方で、批判も少なくないという。1882年から翌年にかけてのジェローム A. ハート（Jerome A. Hart）という人物、もしくはウエイランド・ボール（Wayland D. Ball）師という聖職者と交わした書簡のほとんどが翻訳と出版に関わる話題となっている。

また、その書簡には、『クレオパトラの一夜』を出版したワージントン社が、この作品が卑猥だとして外部から批判を受けているにもかかわらず沈黙を保っていることをとりあげ、ハーン自身にとっては、それがかえって気がかりであると述べている。(4)ゴーチェ作品の「モーパン嬢」の出版もワージントン社に願い出たいところだが、そのような状態なので言い出せないでいることなど、ハーンの悩みは尽きない。それというのも、フランス文学の翻訳出版の折には、自己負担までして出版にこぎつけたという経緯があった。(5) ほかにも、出版社捜しにてこずって出版にこぎつけるまでに6年ほどかかったとも言われている。このあたりにも、この翻訳本に対するハーンの意気込みが感じられるといえるだろう。

エドワード　L. ティンカーは、『アメリカ時代のラフカディオ・ハーン』（*Lafcadio Hearn's American Days*, 1922）で、ハーンは翻訳という形で、文学への関心を満足させようとしているが、反応が出たのはゴーチェが欧州で有名な作家であったからであり、ハーンの翻訳如何の問題ではないという。もしハーンが自分の名前で出版しようものなら出版社がついたかどうかを疑問視しているのであった。(6)

もう一点、翻訳の質の向上に留意することは言うまでもないが、ゴーチェ作品はアメリカ人に受け入れられるのかとなると、すでに触れたようにモラルを盾に非難する意見もあったことがハーンを悩ませたようである。当時のアメリカが、ヴィクトリア朝のモラルに左右されていたこともその一因だった。一例をあげると、幻想的な物語を書いたエドガー・アラン・ポー（Edgar Alan Poe, 1809-49）も、生前は不遇であり、アメリカよりフランスでの評価が高かった。背徳の美を前面に出したような作品が正当な評価を受けるには、当時のアメリカはまだ機が熟していなかったのかもしれない。

ハーンは、ポーの価値もいち早く認めており、東京帝国大学の教壇に立った折には、ポー作品の紹介に努めた先駆者となっている。シンシナティ時代からよく知られている「烏」（Raven）に加え「グール」（Ghoul　屍を食らう鬼）(7)という敢えて唾棄すべきペンネームをも自嘲的に使用していたことからして、ハーンが周囲の風潮にとらわれることなく、独自の美を追求する姿勢を貫いてきたことが知られる。そんなハーンが、ゴーチェの幻想小説に関心を持ったのも当然の流れといえるかもしれない。先のボール師あての書簡では

「ゴーチェは哲学の学派の創設者ではないが審美論と表現を体系化した元祖となるべき人物だ」[8]と述べていることからしても、ハーンの英訳にかける意気込みが感じられるだろう。しかもこの翻訳を通して培われた技術と美意識が、その後のハーンの文筆家としての人生に少なからぬ影響を与えたのであった。

ちなみに、先のポー論に続き、ゴーチェに関しても東京帝国大学の講義で触れている。ハーンの東京帝国大学の講義集の一つの章に、「フランスロマン主義に関する注釈」(“Note on Some French Romantics”)と題する文学論[9]がある。ゴーチェは芸術のための芸術を唱え、ギリシアに造詣が深かったこと、ならびに常識派であったが、文学に対する宗教的あるいは慣習的な制限に対しては断固として戦い、成功をおさめたと述べている。その具体例として「クラリモンド」(“Clarimonde”)を取り上げ、「吸血鬼の物語で、死女が恋人を不思議な幻惑状態に置き、夜ごとにその血を啜るためにやって来る話」と内容を紹介している。本来恐ろしい話を、ゴーチェが大変美しい話にしたと絶賛しているのである。書簡においても、ゴーチェ作品として気に入っているもの(pet stories)として、「クラリモンド」と「アリア・マルセラ」に言及している。さらに、1882年に『クレオパトラの一夜』と題する作品集に初めて登場した「クラリモンド」は、1899年にはブレンターノ社からハーン訳『クラリモンド』と題する単独の作品としても出版されていることを付け加える。

本稿では、「クラリモンド」の英訳を題材に、ハーンがその翻訳を通して何を受容し、それをどのように自己の作品に活かしたのかをみてゆく。吸血鬼であろうと、その「愛」が純粋であると考えられる限り、ハーンのこの作品のとらえ方はすこぶる肯定的であった。そして、「愛は死より強い」もしくは「死後の愛」というテーマは、ハーン自身の作品創作の上で、終生意識することになったのである。特に、ニューオーリンズ時代の作品にとどまることなく、その後の日本での作品においても、ことあるごとにこのテーマは繰り返し言及されてきた。そこで、これに該当するハーン作品を紹介することにより、ハーンの意図する「愛」とはいったい何なのかを考察する。また、それと同時に、ゴーチェから学んだ色彩豊かな作品の創出、もしくは絵画的な美へのこだわりについても考えてみたいと思う。

2.「クラリモンド」を巡って

ハーンが英訳して出版しただけでなく、自分の作品にも取り込もうと考えるようになるほど影響を受けたのは、すでに触れたように、聖職者と吸血女との恋を描いた、ゴーチェの「クラリモンド」である。この作品は、1836年に『クロニック・ド・パリ』誌(*La Chronique de Paris*)という雑誌に掲載された当初は、“La Morte Amoureuse”(「死女の恋」)であった。ただ、1850年に別誌に再掲載の折にゴーチェ自身により吸血鬼の女主人公の名前である“Clarimonde”に直されたとのことである。[10] ハーンの英訳では、タイトルは“Clarimonde”(「クラリモンド」)となっている。この作品は、まず数十ページの中編のため、ほかのゴーチェ作品とともに『クレオパトラの一夜』という題のもとにまとめられて、ハーンによる「読者へ」と題する序文と章末の補遺をつけて出版された。

この物語の主題は、聖職者の青年が吸血鬼に恋をするというものである。昼間は敬虔な聖職者だが夜は吸血鬼との逢瀬を楽しむという二重生活が描かれる。最後に先輩神父によって吸血鬼の墓が暴かれたことにより、青年は相手の女の正体を知り、吸血女との永遠の別れを迎えることになる。しかし、歳月が流れ年老いた神父となったあとでさえ、別離を余儀なくされた吸血女への恋情を完全には否定できないでいる様子が描かれている。

タイトルとなったクラリモンドと名乗る女は、生きている間は高級娼婦、死したのちは吸血鬼となった。男性主人公は聖職者を目指すロムアルドという青年で、この青年が年老いたのち、自分の言葉で、若き日の自分と吸血鬼の恋を回想するという形式をとっている。ゴーチェの描いた聖職者の二重生活は、ドッペルゲンガー(二重人格)を下敷きにした作品であり、もとになったのはド

イツのE.T.A.ホフマン（Ernst Theodor Amadeus Hoffmann, 1776-1822）の作品とのことである。幻想作品を代表するドイツのホフマンにゴーチェがいかに傾倒していたかは次のような例からも明らかである。少し長くなるが、ホフマン、ゴーチェという流れが、ハーンの創作に関わってきていると考えられるので紹介する。

小柳保義は、ゴーチェの翻訳作品集『吸血女の恋』（作品「クラリモンド」はこのタイトルで入っている）の解説で、ホフマンの『セラピオン兄弟』の当作品への影響を指摘する。(11) また、渡辺響子は「幻想小説家としてのテオフィル・ゴーチェ」と題する論文で、「ホフマンに対する敬愛を隠すどころか、自分の作品の登場人物にもセラピオン師（ロムアルドの先輩聖職者）など、ホフマンの登場人物と同じ名前を付けたり…」(12) と述べている。ゴーチェのホフマンへの熱き想いは、「クラリモンド」を発表した数か月後の1836年8月14日に、ゴーチェ自身が「ホフマンの幻想小説について」と題して『クロニック・ド・パリ』誌に発表した小論に込められている。

その小論中、ゴーチェは、ホフマンのことを「画家であり、詩人であり、音楽家でもある彼は、すべてを音、色彩、感情という三重の局面からとらえる」(13) と述べている。ゴーチェ自身も画家を目指したことがあったことから、ホフマンの執筆スタイルに共感を覚えたことだろう。

そのようなゴーチェの美意識に強いあこがれを持っていたハーンは、先にも触れた「読者へ」と題した序文で、ゴーチェの作家として生きることを決断した過程を次のように説明する。

> Gautier was an artist in the common acceptation of the term, as well as a poet and a writer of romance; and in those pleasant fragments of autobiography scattered through the *Histoire du Romantisme* we find his averment that at the commencement of the Romantic movement of 1830 he was yet undecided whether to adopt literature or art as a profession; but, finding it "easier to paint with words than with colors," he finally decided upon the pen as his weapon in the new warfare against "the hydra of classicism with its hundred peruked heads."(14)

ハーンも色彩へのこだわりを持った作家であったことから、ホフマンに始まり、ゴーチェが開花させた手法を取り入れて、独自の作品を創作するに至るという過程が読み取れる。このあたりに19世紀中期から後期にかけてのロマンティシズムの流れの中で創作を志したハーンの意図が読み取れるのではなかろうか。

ところで、「クラリモンド」をより衝撃的な物語にしているのは、二重人格を体験するのが聖職者というところである。夜に活動する半分は昼とは全く別人格となり、聖職者はおろか人の道からも転げ堕ちてしまったという設定なのである。ハーンは、日本で仕上げた作品中、僧職にあるにも関わらず日頃の不心得から人食いに成り下がった僧（「食人鬼（じきにんき）」）、簡単にあやかしにだまされる僧（「常識」）などを語りなおしているが、聖職者の偽善を告発する「クラリモンド」のような作品に早いうちから親しんだがことが影響していると思われる。

ハーンの場合、幼少期に父母に去られ大叔母に養育されるという経験から、自分は神の恩寵からは見放されていると考えたようだ。カトリックの厳格な宗教学校での教育などは逆効果で、キリスト教に対する不信感が芽生えたことはよく言われるところだが、それだけに、ゴーチェの作品のような妖婦に惑う聖職者という設定には抵抗がなかった。「クラリモンド」最後の部分のハーンの英訳は次のようである。

> …All communication between our souls and our bodies is henceforth forever broken. Adieu! Thou wilt yet regret me!" She vanished in air as smoke, and I never saw her more.
>
> Alas! She spoke truly indeed. I have regretted her more than once, and I regret

her still. My soul's peace has been very dearly bought. The love of God was not too much to replace such a love as hers.[15]

墓を暴かれ、聖水をかけられたことにより、この世からの退去を余儀なくされた吸血鬼クラリモンドが消え去る前のあがきのようにも聞こえるが、青年ロムアルドは彼女の予言どおり、年老いたのちまで彼女への恋慕の情を捨てきれずにいる。ハーンは“miss”の意味で“regret”を計三回用いて、ロムアルドがクラリモンドへの執着心を捨て去るどころか、むしろその喪失感を強くするあたりを英訳した。

このセリフのあと年老いたロムアルド神父による、女の顔を見てはならないというような少々教訓めいたセリフが続く。しかし、ロムアルド自身は、相手の正体を知った今も、恋情を消し去ることができないまま、数十年を生きてしまっているのである。反面教師として自分の過去を語るという形式をとっているものの、すでに人生の終焉をそう遠くないところに見る齢になってもなお解けない吸血女への思いのほうに、この作品の意図があるように思えてならない。

「神の愛すら彼女の愛にかなわない」という部分をとらえ、前述の小柳は次のように述べている。

修行を積んだ先輩司祭が後輩の僧侶に説教するという形の筋立てにしては、いかにも異様であるが、もともと異教思想への共感を口にしてはばからなかった作者（ゴーチェ）であってみれば、殊勝な宗教的訓話の体裁は外被に過ぎず、本意はむしろ、取り澄ました偽善的なキリスト教批判と異教的で官能的な快楽主義の宣揚にあったのではないかという気がする。[16]

キリスト教に対して批判的だったハーンだけに、ゴーチェのこのような取扱いに食指が動いたことは確かだが、この作品の翻訳を通して得たのは、まず「愛は死より強い」というテーマであろう。吸血女クラリモンドは、いったん死んだものの、死の世界から舞い戻ってくる。その理由として「愛は死より強い」を強調する。次は彼女のセリフである。

I have kept thee long waiting, dear Romuald, and it must have seemed to thee that I had forgotten thee. But I come from afar off, very far off, and from a land whence no other has ever yet returned. There is neither sun nor moon in that land whence I come … and nevertheless behold me here, for Love is stronger than Death and conquer him in the end.[17]

この作品では、いったん死んだクラリモンドからの人間の男性に対する積極的な働きかけが読み取れる。彼女は、会いたい一心で死者の国での困難を克服してこの世に舞い戻ってきた。一途に進む吸血女の行動の原動力になっているのが、男に対する愛の力なのである。

また、倒錯的ではあるがここで描かれたのは「死後の愛」である。人間同士では成立しなかった愛が、死んだ後に復活することによりいっそう激しく燃え上がったのである。相手が吸血鬼と知ったのちも、逃れようとするのではなく、知らないふりをしてその関係を続けるところに明らかである。女の方も青年を死なせないよう、自分が生きるために必要な分だけの血を少しだけ吸うという、いじらしさを見せる。しかも、ロムアルドの白い腕に浮き出た青い血管、そこから流れでる赤い血といった色彩が印象に残る描写である。ハーンは、英訳した「クラリモンド」の補遺で次のように述べている。

The idea of love after death has been introduced by Gautier into several beautiful creations, sometimes Huffmanesquely, sometimes with an exquisite sweetness peculiarly his own. Among his most touching poems, there is a fantastic, —*Les Tâches Jaunes*, — so remarkable that I cannot refrain from offering a rude translation of it.[18]

こう述べてから、ハーンは二ページにも及ぶ長い詩を英訳している。この内容は、名前こそ出ていないが、クラリモンドとロムアルド青年の愛を要約していると考えられる。こうして、白日の下に生きる健康な男女の愛ではなく、片方の死によって生まれた背徳の愛というところに関心を持ったハーンは、やがて自分の創作にもこのような愛の形を取り入れようとしたことがうかがわれる。ニューオーリンズ時代以降、ゴーチェ作品の翻訳から得られた、キリスト教的なモラルとは相いれないような愛をテーマとして扱い始めたのである。これ以降は、ハーンが創作した作品について順を追ってみてゆくことにする。

3. ハーンの創作における翻訳作品の活用

ここでは、まず「死後の愛」をテーマにしたもの、並びに「愛は死より強い」を掲げて描いた作品をそれぞれ二点紹介する。ハーンは、この時代に二つずつの作品をほとんど同じ内容に仕上げているのである。まず「死後の愛」に関したものから見てゆきたい。

『タイムズ・デモクラット紙』（*The Times Democrat*）の1884年4月6日付の記事として「死後の愛」（“L’ Amour après la Mort”）[19]と題する作品が登場した。実はこの作品は、『デイリー・アイテム紙』（*The Daily Item*）に1880年10月21日付で「死んだ恋人」（“A Dead Love”）[20]と題して発表したものとほぼ同じ内容である。1880年の方は、英語で「死んだ恋人」と題しているが、1884年になると、「クラリモンド」を意識してかフランス語で「死後の愛」となっている。

内容は、女に対しあまりにも激しい恋心を抱いたせいで、心の平安を失ったまま亡くなった男には、死んでも心の安らぎが訪れることはなかったというものである。成仏できない男はもう一度生き返りたいと願うが、日々は無情にも過ぎ去って行った。ある日、彼が愛した女が、彼が埋葬されている納骨堂にやってくる。植物に姿を変えた男は墓石の割れ目から外に生え出して桃色に変わるが、男のアピールに気づくこともなく、女は去って行ってしまうというものである。

二作品はほぼ同じ内容だが、先に作られた作品では、男が女に自分の存在を気づいてもらおうと花に変わる設定だったが、そこが後の作品では変更になっている。あとの方は花ではなく、草の姿のままであり、岩の外に生え出した草は、女に対する恋情のあまり緑から桃色に変わるのであった。

色彩にこだわるハーンだけに、岩の間から生え出た花というだけではものたりなかったのか。むしろ緑で何の変哲もない草が恋に狂って桃色になるという方が、より大きなインパクトが得られると計算したのだろうか。そのあたりにハーンの意図が感じられる。いずれも、女に気づいてもらいたい一心からの訴えである。植物に変わった姿で一方的に働きかけを試みるものの、すべて徒労に終わる。恋に殉じて死んだ男はあの世の恋でも報われなかったのである。

ただ、これらの作品では、女性の存在自体が希薄で、男性の言葉を通してしかその姿が見えてこない。人間対人間という関係ではなく、生前も死後も男が描いた女性像が語られるだけなのである。男の独り芝居という感じはぬぐえないし、男性主人公があまりに卑屈で、自虐的な作品という印象も強い。ゴーチェのクラリモンドが、ロムアルドとの逢瀬ではいつもリーダーシップを発揮していたのに対し、ハーンのこれらの作品では、女の情報があまりにも乏しいといわざるをえない。はたして女は人間なのか、あるいは異類のものなのか。それすらはっきりとは言及されていない。何か中途半端な感じがぬぐえない作品である。色彩と独白からなる幻想空間、大きな作品のための習作であったかもしれない。

また、「愛は死より強い」のテーマの作品も、ニューオーリンズ時代にたて続けに創作された。先ほどの男性主人公の独り相撲のような作品とは異なり、少し長くなった分だけ、物語の設定、ならびに、その結末もしっかり描かれている。こちらも、似通った作品が二つ存在する。一つ目は、『アイテム紙』に「死んだ恋人」を発表したおよそ1週間前の1880年10月15日付の「黄金の泉」（“The Fountain of Gold”）[21] であり、二つ目は、それを加筆修正したと思われる「熱帯間奏曲」（“The Tropical Intermezzo”）[22]である。

特に二つ目は、1885年に友人とフロリダを旅行したハーンが、「フロリダ幻想」と題して書いた数編からなるエッセイの一部である。スペイン王の命令を受けて不老不死の泉を探しているうちに、それがフロリダ発見につながった16世紀初頭の探検家ポンス・ド・レオン（Ponce de León, 1460-1521）に夢をはせながら仕上げた作品群である。前者はゴーチェ作品の翻訳出版の前だが、おそらくゴーチェ作品は知っていただろう。というのも翻訳出版するまでに、ハーンは原稿を暖めていたことが指摘されているからである。また、すでに触れたように、ポンス・ド・レオンの青春の泉（不老不死の泉）が念頭にあったから、「黄金の泉」と命名したのだろう。死んだスペインの老兵士の枕元で東の空が黄金に輝き、朝霧が黄金の泉と化したというところで話は終わる。命が果ててむしろ心の平和を取り戻した老兵の安らかな死を祝福するかのように、眩いばかりの黄金の太陽からの光が泉のごとく降り注ぐのであった。このあたりは色彩が持つ印象を惜しみなく使用した成果といえるだろう。

いずれの作品も、スペイン人の兵士が森の奥を目指して歩き回るうちに、この世とは分断されている異空間に迷い込み、そこで出会った美女との甘美な暮らしに酔いしれる。青春の泉（不老不死の泉）の水を飲んだために時間を超越した生活が続く。しかし、遠くに聞こえるラッパの音に自分が過ごしてきた現世への思いが交錯し始める。二つの記憶のはざまで苦しむ兵士は音の聞こえる方へと足が向き、近づいてはいけないという影のある地域に足を踏み入れたことにより、結局現世に舞い戻ることになる。

この世に戻った兵士は、日本の浦島太郎のように過ぎ去った年月をその身をもって体験することになった。その結果、死を迎えようとする老兵士の枕元に立つ神父は、快楽に身をゆだねてきた兵士に悔い改めよと諭すのだが、老兵はあの美女との暮らしに戻れるなら死など怖くないと宣言して死んでゆくというものである。死んだ老兵の安らかな笑顔に、神父は老兵が探し求めていたあの世の美女に再会したことを確信する。ハーンのこれらの作品はあくまで男性の視点から描かれているのであって、前作同様、女は生身の存在とはほど遠い。このテーマでの異界の女は、人間である男が抱く理想が形成した産物と考えられよう。

もう一点、ハーンがこの作品の結末にキリスト教の神父を登場させていることに注目しなければならない。ただし、神父は老兵をキリスト教へと回心させることができなかったばかりか、老兵が異界の女との再会を期して嬉々として死を待ち望むのをただ見守るしかないという役回りで類似している。この舞台では宗教は無力だったといわんばかりである。

しかも、神父から見たら異界での快楽という禁を犯したものでも安楽な死を迎えられるという結末は、日本での浦島の物語を想起させる。ハーンは浦島の物語が大変好きだったといわれており[23]、日本で仕上げた「夏の日の夢」（“The Dream of a Summer Day”）[24]という作品では浦島の話を挿入している。浦島は開けてはいけない土産の玉手箱を開けてしまったために、美女との暮らしが待つ異界への帰還の機会を失ったが、苦しむことなく老衰死を迎える。ならびに死後に浦島明神に祀られたというエピソードもあることから、ハーンは、禁を破った（乙姫との約束を果たせなかった）浦島に対する日本人のやさしさの表れとしてとらえている。そこには、死が現世の苦しみからの解放を意味し、むしろ異界へ扉を開いてくれると信じることの合理性が存在していたのである。ニューオーリンズ時代に仕上げた「黄金の泉」ほかの結末には、のちの浦島物語へとつながる、ハーンの姿勢の一端を垣間見ることができるのではなかろうか。

この後、ハーンは日本において、伝説や昔話、あるいは当時流布していた怪談話の翻案作品を作り続けるが、「死後の愛」や「愛は死より強い」のテーマはことあるごとに取り入れられた。中でも「死後の愛」、ないし「愛は死より強い」のテーマが顕著にみられるのは、翻案ものの「宿世の恋」（“A Passional Karma”）[25]と「伊藤則資の話」（“The Story of Ito Norisuke”）[26]である。

日本での作品は、原話があるものの翻案なので、筋においてあまり逸脱することはできないが、男女の愛をいかに解釈するかは語り直しをす

るハーンに任された。前者は、相手が死者だと知ると、その恐怖から逃れようとする行動に出た青年（萩原新三郎）が主人公であり、後者は、前世でも恋人だったということを知ったからには、二度と離れることがないようにと女性に殉じることを決めた青年（伊藤則資）の話である。いずれも中国の怪談が原話であり、それぞれ『剪灯新話』と『今古奇観』である。

「宿世の恋」は、有名な『剪灯新話』の中にある「牡丹燈記」（日本名「牡丹灯籠」）が原話である。しかし、何度も語りなおされており、ハーンが依拠したのは、明治中期に落語家の三遊亭円朝の高座をもとに創られた歌舞伎であると、作品の冒頭で自ら原典を明らかにしでいる。あまりにも有名な怪談のために、筋をかえてしまうことはできないが、ハーンなりの解釈がその描写に加えられた。相手の女性が死者だとわかったとき、女への愛と死の恐怖との間でもだえる男性主人公をハーンは次のように書き表している。

> Never before — not even in what time she lived — had O-Tsuyu appeared so beautiful; and Shinzaburo felt his heart drawn towards her with a power almost resistless. But the terror of death and the terror of the unknown restrained; and there went on within him such a struggle between his love and his fear that he became as one suffering in the body the pains of the Shō-netsu hell.[27]

この後、恐怖に耐えかねた男は、高僧からお守りを得たにもかかわらず、幽霊に買収された下男の裏切りで、お守りがすり替えられたことから、不実をなじる女の幽霊に取り殺されてしまう。そんな男についてのハーンの感想は次のようである。

> …he was too selfish to give up even one miserable existence for the sake of the girl that came back to him from the dead. Then he was even more cowardly than selfish.[28]

その一方で、ハーンが、死者に殉じることをいとわない主人公として称賛したのは、「伊藤則資の話」に出会ったときであった。この作品の原典は日本の『當日奇観』であるが、この『當日奇観』こそ、中国の『今古奇観』の翻案ものだったのである。ハーンはこの二つが同じものだとは知らずに、すでにニューオーリンズにいるときに『今古奇観』が原話である数編を翻案して、『中国怪談集』（*Some Chinese Ghosts*, 1887）のタイトルのもとで出版していた。その一作品が「孟沂の話」（“The Story of Ming-Y”）[29]であり、「伊藤則資の話」と原典を同じくするのであった。

「孟沂の話」の主人公、孟沂は科挙を目指す優秀な青年で時折家庭教師をしていたが、通いの途中で絶世の美女に出会い逢瀬を重ねる。相手は薛涛という高級娼婦で昔の政府の高官の愛人であった。ちょうどクラリモンドを思わせるような女性である。二人の逢瀬が孟沂の父親に知られるところとなり別離の時が来る。しかし、孟沂を愛する薛涛が別れ際に形見にくれた品々を、大成した暁にも大切にする孟沂であった。

自分の机に置かれた形見の品に別れた女性を思いやる孟沂の姿が圧巻である。中国の原話では、幽霊にもらったといって見せびらかしたりする軽薄な人物として描かれているが、ハーンは、思いがこもった品々の出所を誰に語るでもなく、ただ一人懐かしむ孟沂の姿に、たとえ相手が幽霊とはいえ真剣に愛した証だとして、その愛の深さを描き出した。また、春から秋へと移ろう季節を色で表現しており、季節の変わり目が別れの時を表すこととなっている。

一方の「伊藤則資の話」は『當日奇観』の「伊藤帯刀中将重衡の姫と冥婚」という歌物語の翻案で、主人公の伊藤は、平家の末裔で、勉学で身を立てるしかない青年という設定である。これが科挙を目指す孟沂と似ている。ただ、伊藤の相手となる姫の父親が日本の史実を背景とした人物に置き換えられていることが大きな相違である。すなわち、山中深く迷い込んだ伊藤が遭遇した相手の姫は、平重衡の息女であった。過去において恋人であった姫と、数百年の時を経て奇しくも再会したのである。相手と自分との因縁を知り、相手が

死者と分かってもそれに臆することなく、これを機に彼女との縁を復活させる人物として描かれる。

ここでも伊藤が迷い込んだ山中や村の景色には、ハーンの描写の工夫がある。ポーの「アッシャー家の崩壊」中の洋館を取り巻く光景のような暗さとは一味異なる日本の山里の光景の描写は、ゴーチェ作品の絵画的な要素を学んだハーンならではのものといえるかもしれない。

伊藤は、彼女の迎えが来るという十年後まで現世で過ごすが、その人生は死者の国にいる姫に捧げられたものになっていたという。孟沂同様、伊藤も別れ際に結婚の証として硯をもらうが、それは死者となった伊藤の棺に入れられることになる。伊藤の母が息子の願いを聞いて棺に入れる前に調べてもらうと、その硯は平安時代のものであったという話がついている。

「牡丹灯籠」の新三郎が軽蔑に値するような男なら、伊藤はハーンが抱く愛の理想、すなわち死をも恐れず一途に愛を貫いた人物であった。日本で出会ったこれらの作品の結末を変えてしまうことなく、ハーンなりの語り直しの手法で愛の物語を語りなおしたのであった。

ニューオーリンズから日本までの二十年余りの執筆活動を通して、ハーンはことあるごとに「愛は死より強い」というテーマを意識し、創作してきたが、その原点は、ニューオーリンズ時代にゴーチェの作品を英訳したことに遡れるのではなかろうか。金沢公子は「テオフィル・ゴーチェの幻想小説の世界」で、「この世の人間があの世の存在と恋に陥るテーマは、怪談奇談にはごくありふれたテーマに違いないが、ゴーチェの主人公たちはすべて、愛する相手が死霊と分かった時、自分の命を捨ててまでもその霊と合体することを願い、この世の女性に対する未練を失ってしまうという特徴を持っている。このことはあの世への憧れがゴーチェの深い関心の対象であったということを示すものであろう」[30]と述べているが、ハーンの場合もゴーチェを踏襲している。特にハーンは、父に離婚されて一人ギリシアに帰った母を愛おしむあまり、いつも男性側の理不尽な言行で劣勢に立たされるのが女性だという印象をもっていた。それゆえ、ゴーチェ以上に、男性に対し、いったん愛を誓ったからにはそれを守りとおさなければいけないという思いを強くしていた。そのようなハーンの思いが、創作においても貫かれたといって過言ではなかろう。

注

(1) Beongcheon Yu, *The Ape of Gods: The Art and Thought of Lafcadio Hearn*, (Detroit: Wayne State Univ. Press, 1964) 3-4.

(2) Lafcadio Hearn, "To the Reader," *One of Cleopatra's Night and Other Fantastic Romances* (N.Y.: Worshington,1882), v-ix.

(3) Beongcheon Yu, 27.

(4) *The Writings of Lafcadio Hearn* vol.8 (Boston & N.Y.: Houghton Mifflin, 1922) 1883年1月 Jerome Hart 宛　240-41.

(5) *The Writings of Lafcadio Hearn* vol.8 1882年月日不明 Wayland Ball 宛　243.

(6) Edward L. Tinker, *Lafcadio Hearn's American Days* (N.Y.: Dodd & Mead, 1924) 77.

(7) ハーンが「グール」のペンネームを使用したのは、シンシナティで挿絵画家のファーニーと共同出版した絵入り雑誌『イ・ジグランプス』の文学欄。

(8) *The Writings of Lafcadio Hearn* vol.8 1882年11月 Wayland Ball 宛 246-47.

(9) "Note on Some French Romantics," John Erskine ed. *Life and Literature* (N.Y.: Dodd & Mead, 1917)

(10) テオフィル・ゴーチェ『吸血女の恋』小柳保義訳（現代教養文庫、1992）解説220.

(11)『吸血女の恋』221.

(12) 渡辺響子「幻想小説家としてのテオフィル・ゴーチェ」澤田肇、吉村和明編『テオフィル・ゴーチェと19世紀芸術』(上智大学出版、2014) 275.

(13) テオフィル・ゴーチェ「ホフマンの幻想小説

について」、加藤民男訳『ユリイカ』1980年4月号 199-200.

(14) Lafcadio Hearn, “To the Reader,” *One of Cleopatra's Nights and Other Fantastic Romances*, vii.

(15) Lafcadio Hearn, *One of Cleopatra's Nights and Other Fantastic Romances*　125.

(16)『吸血女の恋』222.

(17) Lafcadio Hearn, *One of Cleopatra's Nights and Other Fantastic Romances* 105.

(18) Lafcadio Hearn, *One of Cleopatra's Nights and Other Fantastic Romances,* Agenda 317-19.

(19) Charles W. Hutson ed, *Fantastics and Other Fancies*（Boston & N.Y.: Houghton& Mifflin,1914）

(20) Charles W. Hutson ed, *Fantastics and Other Fancies*

(21) Charles W. Hutson ed, *Fantastics and Other Fancies*

(22) *The Writings of Lafcadio Hearn*　vol.1 “The Tropical Intermezzo” in *Leaves from the Diary of an Impressionist*

(23) 小泉節子「思い出の記」田部隆次『小泉八雲』（北星堂、1980）166.

(24) *The Writings of Lafcadio Hearn* vol.7 *Out of the East*

(25) *The Writings of Lafcadio Hearn* vol.9 *In Ghostly Japan*

(26) *The Writings of Lafcadio Hearn* vol.8 *The Romance of the Milky Way*

(27) *The Writings of Lafcadio Hearn* vol.9 276.

(28) *The Writings of Lafcadio Hearn* vol.9 286.

(29) *The Writings of Lafcadio Hearn* vol.1 *Some Chinese Ghosts*
グスタフ・シュレーゲルの仏訳(1877)で『今古奇観』を読んだハーンは、「油売郎独占花魁」の一部である「陳家の食客」をもとに「孟沂」を書いたとしている。

(30) 金沢公子「テオフィル・ゴーチェの幻想小説の世界」成城大学文学部『成城大学法学教養論集』2号(1981年2月) 6.